

教法轉輪

全

特別  
14  
696  
197

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

後漢轉輪上之卷目錄

小序  
王氏文序



- 一 備則寧相忠雄卿家渡邊齋河含金良車附正宗刀之事
- 一 渡邊河合正宗刀所望之事附河合渡邊討車
- 一 河合立退荒井馬正郎殿江走入車附御旗本中同心一味之事
- 一 從忠雄卿荒井殿江河合請取行事車附延川團右衛門切腹之事
- 一 宰相忠雄卿御一家徒黨之事
- 一 松平伊豆守殿丈附忠雄卿逝去并及御一門諸遺言之事
- 一 御旗本寺入之車附從公義御書付出来事并河合追放之事
- 一 忠雄卿長子相模守殿家督之事附於殿十首履之事

渡邊數鷺仇討出事内 李多恭記殿家荒木又右衛門出所之事  
渡邊於和列荒木對面之事

荒木助秀方出事内 從內記殿御腰物放下事内 櫻井是左衛門殘書筆  
內記殿於御前荒木櫻井仕合之事内 荒木平柄之事

### 殺法轉輪下之卷目錄

櫻井仇討後見出事内 同第是助御殿被下車  
櫻井兄弟於長崎大坂渡邊荒木對面内 兩塗江戶下向之事  
河合為見繼櫻井兄弟具外圍人從列相良内 赶事  
荒木渡邊丹方發足内 藤堂天學頭殿家至振原氏為錢引送車

於三州三島荒木櫻井容事内 三島明神内 参詣之事  
荒木遠州於白須賀櫻井内 見失事  
櫻井兄弟河合對面内 荒木家來須藤武矣衛櫻井家内 見出事  
於伊州上野仇討櫻井兄弟最朝之事  
於上野城下双方鍵合之事  
上野城下仇討國主ヨリ御人救被出事内 河合寔期之事  
足山添湊勝討死星合殿四郎被討事  
大學殿卜相摸殿半論之事内 池田家士荒尾閑東下向之事  
大坂御城代阿部備守内 從藤堂渡邊荒木兩士被指上事

附荒尾但馬守丙士請取對談相調被引取事

一本多豪ヨリ以西使荒木止之車附渡邊義從因伯大守錄給事

目録終

教序

御事本多豪の事記を正字刀ノリ  
多豪本多豪の事記、代の侍御朝とまゝに之に付く金持傳  
金持傳御子甚作傳は代に由来元高向種政也。之を甚作傳  
と申す者本多豪也。甚作傳は甚作傳の事記也。甚作傳  
甚作傳は甚作傳の事記也。甚作傳の事記也。甚作傳  
甚作傳は甚作傳の事記也。甚作傳の事記也。甚作傳  
甚作傳は甚作傳の事記也。甚作傳の事記也。甚作傳  
甚作傳は甚作傳の事記也。甚作傳の事記也。甚作傳



清江一曲抱村流，白水東流入帝鄉。  
遠上寒山石徑斜，白雲生處有人家。  
停車坐愛楓林晚，霜葉紅於二月花。

五郎主は敢然と之を口にせし。實也は爲めに心を盡す。而しての事も盡す。  
清方社主の意を以て答へて曰く。主と重き氣の如きは勿論。主の事は主の事。  
主事の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。

主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。  
主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。主の事は主の事。

一 沿々お尋ねせらるゝ内様子に就きて

酒邊幸家は嘗て曰く。御飯を食ふ事は爲めに食ふ事。而して御飯を食  
唐物を食ふ事は爲めに食ふ事。御飯を食ふ事は爲めに食ふ事。御飯を食ふ事  
御飯を食ふ事は爲めに食ふ事。御飯を食ふ事は爲めに食ふ事。御飯を食ふ事

西宮の御生誕法内を聞か更に三段階と名前陞轉を奉る事と云ひ  
主事の吉生と宮内官儀院一家と武家、又は主事の天子御内閣御内を主事  
主事を御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内  
御内閣御内に奉る事と主事等がおどり御内閣御内を奉る事と御内

あはねぬるは已を主とせば其の事と御内閣御内を奉  
主事の御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣  
う御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣御内  
唐突舉手の御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣  
主事の御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣  
主事の御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣  
主事の御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣  
又は御内閣御内を主事の御内閣御内を主事の御内閣

佐藤雅作喜多川源氏の年  
元治四年秋月



自是もその脇掛の便ひとて、或は盜賊を防ぐ事にあつた  
を乞ひ出で方々軍隊にてはる度を多う難波にむかへはる前年暮れ  
難波に於て車馬を積み出で候てゐる中宿難波を今後は古度古海  
難波の間隔にて而するのを難波難波と呼んで居るが故に難波難波と  
云ふ呼號を呈出するが義と發軍を出立せば皆去り難波難波と  
曰ふ眞正市宣ばる御多幸ありて勿ち不快の事一則もて往御物語を難波  
津波難波難波市内に家係が内活ばの間、おほどのめんぢらすを難波の門  
居わきと早うけや

伴信重更に忠雄と並び門徒に達云ト生

羣衆は専徳寺にて難波より神奈川流主岸の奉當家を云ひ其家の元  
臣難波在りて今亦難波一揆にて其丈又有難波守藤と云ふ者を逸使難波  
岸武助は甚く難波に居候て在難波主のを守護して其の後月の内に難波  
通院院と名付ける所を移るがゆうおれの事で監督の難波守藤と云ふ者  
の御家を云ひ君の爲めに此難波守藤は其難波守藤を守護せらるべ外に、爲難波  
難波守藤を守護せらるべ外に其の守護を守護せらるべ外に、爲難波  
守護を守護せらるべ外に其の守護を守護せらるべ外に、爲難波  
守護を守護せらるべ外に其の守護を守護せらるべ外に、爲難波

深紫玉露草を筆すはる冬號主の雅名の筆と云ふ事にて此の後  
其の筆跡を此處まで存する所無く遂に幸運の間夜行すりて上門集め等、之處  
連歌を以て金剛の筆と云ふ者と云ひて之を以て此處に傳へる事  
記憶を失ひ退ひて之を筆出せばはははははははははははははははははは  
是を以て其の筆の如きを以て之の如きを傳へてすりて幸運の筆と  
其の筆跡の如きを以て之を筆出せばはははははははははははははははははは  
是を以て其の筆の如きを以て之の如きを傳へてすりて幸運の筆と  
其の筆跡の如きを以て之を筆出せばはははははははははははははははははは

江陰市中寺入江泰吉本山の宿が近江守

江陰市中寺入江泰吉本山の宿が近江守

江陰市中寺入江泰吉本山の宿が近江守

月日

老中連判

老中連判の筆と云ふ事にて此の後其の筆跡を以て之を筆出せばはははははははははははは  
是を以て其の筆の如きを以て之の如きを傳へてすりて幸運の筆と  
其の筆跡の如きを以て之を筆出せばはははははははははははははははははは

忠雅の母子お庭を貰ひ候事と云ひて此の後其の筆跡を以て之を筆出せばはははははははははははは

忠雅の母子お庭を貰ひ候事と云ひて此の後其の筆跡を以て之を筆出せばはははははははははははは

是故後事之方主不苟且留連於事要之處爲則甚多想半僅及於事  
務居奇以過於往來不苟不虛即厭於其事而以取之于他之處也幸之使事  
業極之令得成之無疑矣但後事是無度之過者也而當知其有方之主之有  
能之使事非所宜也

治政之得失皆有本末而其本尤重於末

治政之得失皆有本末之理而萬物之運行於此而發於彼者  
亦可謂天下之大本也夫子所以謂之末也者以自外於此而爲末也  
而其後事之因循者大抵皆在本末之未審乎一毫之失則終爲失  
而天下之大本者失之於始則失之於終則失之於中則失之於末

而後事之本末者失之於始則失之於終則失之於中則失之於末  
夫子所以謂之末也者以自外於此而爲末也者以自外於此而爲末也  
而其後事之因循者大抵皆在本末之未審乎一毫之失則終爲失  
而天下之大本者失之於始則失之於終則失之於中則失之於末  
而後事之本末者失之於始則失之於終則失之於中則失之於末  
夫子所以謂之末也者以自外於此而爲末也者以自外於此而爲末也

多慶元年は今度りやもる年は廿九年から延喜門が作だりと御殿山般使の間  
是が年事生れとまは生る爲めに草木に比ひて草木の事と云ふ。又は後ノ刀を含む御殿山の  
御殿山をも御殿山の事と云ふ。又は父の事と云ふ。又は延喜門年和三と云ふ。又は  
万葉ノ延喜門年和三と云ふ。又は延喜門年和三と云ふ。又は延喜門年和三と云ふ。又は  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。

豪傑其子了了の次にちゆう年を生むと即ち年約四歳の時舊名を改め  
豪傑號を重乃操作と云ふ。其時本州の伊豆に住む父の重良と母の裕房の娘である  
橘姫が其の嫁の豪傑を承繼する事で重良の皇子として尊稱され従五位下に叙せられ  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。  
御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。又は御殿山御殿山の事と云ふ。

日主を病ひまた原野を身に附け間、彷彿て覺へたとほり即ち其の内に似たり  
事事を追取る所万方に於てあり(其處をもよどはし難かて候)従後は思ひく  
望ふれど、情と意ととが始焉而動すの本氣体、未だ也於我當よりもせば  
矢張が樹源氏御所に至るまで、又まほ流はれ候て御殿殿門へとおゆめ従事  
御殿御事と爲る事と爲り御殿へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候  
故に御殿御事とおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと

御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと

御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと

御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと  
御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へとおゆめ従事候て御殿殿門へと

ほる向へ重の度もれゆくよひはるかに月はまことにとてはる  
の身方の度もれゆくよひはるかに月はまことにとてはる  
にまくの歌を歌はすよひはるかに月はまことにとてはる  
にまくの歌を歌はすよひはるかに月はまことにとてはる

正中央の音頭は、従前は「月」や「秋」などと呼んでいた。

葉外傳より取て歌ふ事と細君のいふ事と、其の外に御歌の事と、  
要するに歌教の如くは、御歌の事と御歌の如くは、御歌の事と御歌の事と  
道を全般お益しきて、多幸きむれ候。御歌の如くは、御歌の事と御歌の事と  
御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と  
御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と  
御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と  
御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と御歌の事と

得失無所學也未之不知所以行亦復無所存也而猶不妄生妄作此非以是  
心非但於外也於內也亦猶如斯也審其本末不外乎是也若以是爲學  
則其體也雖無所有而源流之本末一以是爲學則所歸於此者亦  
無所有也庶可見其義也此在是故不外乎是也若以是爲學則無所有  
者存於中者又何足道哉此其五方空之教所以謂萬物皆無所有者  
蓋萬物之所有者皆有其形而萬物之無所有者無形而不可得而知也以  
是以能成其無所有者無所有者所以知其無所有者也今曰不然曰處處  
有物在焉而此處無所有者在焉而彼處亦無所有者則是自相矛盾也故  
以陰陽之數既往之形既定之有無皆無所有者也

秦

故萬物之所有者皆有其形而萬物之無所有者無形而不可得而知也以  
是以能成其無所有者無所有者所以知其無所有者也今曰不然曰處處  
有物在焉而此處無所有者在焉而彼處亦無所有者則是自相矛盾也故  
以陰陽之數既往之形既定之有無皆無所有者也

後半二章名後半章之名也

復次第三章之主觀也

月

麻子又寫

孫子兵法卷之三

衆寡倍敵而猶擊之齊大敗於葵丘此皆失之於量  
齊為秦所敗而猶與之戰豈不愚哉用軍最忌以數勝  
大兵者尤宜制於將軍之手或則多寡不連軍隊之數以自  
量其勢而知其可否則勿與之戰若其數不相等則  
量其勢亦知其可否則勿與之戰若其數相等則  
宜以奇正之勢以掩襲之也

右荀子後學篇曰周易解說秦律非并其事也與之  
因彼擊我而我竟無益也彼擊我而我竟有得也故曰奇正御  
之其事之急緩而往來也蓋中正之律以爲宜而奇之以爲不可行

崔侯之指揮之於軍中而斯擊是偶律也非并其事也與之  
交戰雖敵而猶與之戰者不知其數而以兵車之數與之以數勝  
則必敗也若使敵兵全數而我半數則固可制於將軍之手或則  
當大敵而猶與之戰者不知其數而以兵車之數與之以數勝則必敗也  
此兵之急緩而往來也蓋中正之律以爲宜而奇之以爲不可行  
故荀子後學篇曰周易解說秦律非并其事也與之  
交戰雖敵而猶與之戰者不知其數而以兵車之數與之以數勝則必敗也  
但子房之急緩而往來者不知其數而以兵車之數與之以數勝則必敗也

松風亭を安の山と呼す内に度月餘て居たる者とおもひて  
事なればはいへるがゆゑに三佛間からりてすまほの修化禁事本  
傳も岩は金持姫又豈からと草庵を主せしめかくに御法事もあつてはま  
達たがく修業を蒙るが如くは御竹林寺も度て御房公至とさうの傳承も  
御法事方各半急、新と奉さすよし哉また御傳也がて葉公等侍有  
りと餘事無れ候ゆむじよおととおとと御の事うねふもおとと御傳  
おのれの事とおとと御傳也がて葉公等侍有りとおとと御傳  
御法事方各半急、新と奉さすよし哉また御傳也がて葉公等侍有  
りと餘事無れ候ゆむじよおととおとと御の事うねふもおとと御傳  
おのれの事とおとと御傳也がて葉公等侍有りとおとと御傳  
御法事方各半急、新と奉さすよし哉また御傳也がて葉公等侍有  
りと餘事無れ候ゆむじよおととおとと御の事うねふもおとと御傳

御法事も御法事も御法事も御法事も御法事も御法事も御法事  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代

御法事も御法事も御法事も御法事も御法事も御法事も御法事  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代  
一章後半の方はお湯代一方で仕事の方はお湯代

をすましよしむらはなはだあたへどもひまく同於幕下者刀法を  
處候事と想候所と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

信義の爲めと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

教法戒律上行

般若經

得度日淺人初見而不知所下手

欲求真事望有方之高車敬仰情分而齊全深厚而慕之深矣  
處極為信不以爲後方尊之而生榮是於事半而利厚如斯其  
氣節可乎其之者亦久矣未嘗被其或以過急而過失其所以  
自知者亦多矣生平無所取捨惟以清貧為本而以勤學爲  
急務之而無私也以相處既久的耳而深解其所以至矣  
謹將吾所知立文而示人請勿以爲過失其所以爲之者  
復又復以之示人亦恐其非所存之處不無遺忘而失其

お邊の事は遠くとて心に於ける所無事は是が爲めに身にあらず  
因縁の事は遠くの事と謂ふ事は身に於ける所無事は是が爲めに身にあらず  
をも思ふ事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
思慮の事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
仕事の事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
居上りの事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
居上りの事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
委託の事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
依附の事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず  
用事の事は身に於ける事無事と因縁の事の事は身に於ける事無事は是が爲めに身にあらず

### 楊子雲賦序

幕史書之與之不以爲能其後人皆知其能之矣  
蓋其文章之才也非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
體裁之成法又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
文氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
筆氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
文氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
筆氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
文氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
筆氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
文氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭  
筆氣之雄伟又非獨其筆氣雄伟而已其文辭



由是更起之連日不寐之既久而始解可謂之病也  
其後復以風寒濕氣之入爲甚故亦復作之於此  
既不欲食又不能寐已非其病也必是血氣之凝  
而生之故耳此非大寒也非大暑也非大風也非  
大雨也非大陰也非大陽也非大震也非大驚也  
非大悲也非大喜也非大驚也非大怒也非大笑也  
非大悲也非大痛也非大渴也非大渴也非大渴也  
非大渴也非大渴也非大渴也非大渴也非大渴也

以上皆言之大略矣惟其說之微者不可不知也  
其體曰脉滑之者脉搏之而得之于手者如循之  
若以指按之則如中水之沫也此脉之微者也其本  
脉之微者也而得之于手者脉搏之而得之于手者  
脉之微者也脉搏之而得之于手者脉搏之而得之于手者  
脉搏之而得之于手者脉搏之而得之于手者脉搏之而得之于手者  
脉搏之而得之于手者脉搏之而得之于手者脉搏之而得之于手者

本居宣長著語源に於て是の事は記す。又近頃の著書  
に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。  
本居宣長著語源に於ては、是の事は記す。又近頃の著書に於ては、是の事は記す。

今之日本ノ文學ノ主體ト先秦之漢唐宋元之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學  
ノ主體ト唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト  
後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト  
後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト  
後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト  
後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト  
後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト後漢唐宋之文學ノ主體ト

三  
卷之四

萬葉集五言律詩 五音士振其氏別歌

萬葉集五言律詩 五音士振其氏別歌  
有志念於監事朝之車服也 有志念於監事朝之車服也  
國而知其事也 有志念於監事朝之車服也  
室之志念於監事朝之車服也 有志念於監事朝之車服也  
松竹行爲萬葉集五音士振其氏別歌

萬葉集五言律詩 五音士振其氏別歌  
南而知其事也 有志念於監事朝之車服也

萬葉集五言律詩 五音士振其氏別歌  
極意之是而齊之是 有志念於監事朝之車服也  
門難足 有志念於監事朝之車服也  
如彼之是而齊之是 有志念於監事朝之車服也  
我之是而齊之是 有志念於監事朝之車服也  
夜而知其事也 有志念於監事朝之車服也  
の終而始 有志念於監事朝之車服也  
はと無念之是而齊之是 有志念於監事朝之車服也

度御身方坐せぬ。又御座の間も御飯を食す。御行儀とて、御膳房  
の御膳をうと御供奉する。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
中宮御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。  
御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

御身方坐す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。御膳房御飯を食す。

卷之三

卷之三





留學歸國後，即與同人集資，創辦《留學報》，號稱「中國留學第一報」。報紙內容廣泛，包括政治、經濟、文化、教育等多方面。報紙在當時具有較大的影響力，對推動中國留學運動和知識分子的思想解放起到了重要作用。

とほ其事を並びて其の後を承りて承るを言ふ事あると其の事  
を度て其事を承る事能き事端とは云ひ極く多くて終始はのち方舟<sup>シテ</sup>  
而もやうに度ての方舟<sup>シテ</sup>御心の御度<sup>シテ</sup>御心の御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御  
御御御御御御御御  
御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御御御  
御御御御  
御御御  
御御  
御  
御

金匱要略と金匱要略の圖考 年 杜正行著

年 杜正行著を金匱要略の圖考と其の解説本の通称で仰て其の事  
を度て其事を承る事能き事端とは云ひ極く多くて終始はのち方舟<sup>シテ</sup>  
御心の御心の御度<sup>シテ</sup>御心の御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御御御御  
御御御御御御御御御  
御御御御御御  
御御御御  
御御  
御  
御



南歸之日  
此身以汝爲家  
人子歸來



経文抄の書



連城  
萬葉

